

実習スーパービジョンにおける実習指導者と 社会福祉士養成校教員との連携に関する現状と課題

— フォーカスグループインタビューデータのテキストマイニングから —

渡邊隆文¹ 安保 尚² 井坂優美³ 檜木博之⁴

初鹿野美穂⁵ 和光勇介⁶ 渡辺健市² 渡辺裕一⁷

¹健康科学大学 健康科学部 福祉心理学科 ²富士吉田市役所 ³みのりの里いいとみ

⁴身延山大学 ⁵山梨赤十字病院 ⁶富士河口湖町役場 ⁷武蔵野大学

The present conditions and problems about the cooperation between
the field work supervisors and school instructors of certified social
worker in the supervision in field work practicum
～ Based on analysis of text mining on focus group interview ～

WATANABE Takafumi, ANBO Hisashi, ISAKA Yumi, NARAKI Hiroyuki,
HAJIKANO Miho, WAKO Yusuke, WATANABE Ken-ichi, WATANABE Yuichi

要 旨

近年、福祉に関わる様々な問題が取り上げられ、支援を担う社会福祉専門職の質と量の確保が求められるようになった。社会福祉士の養成においては、これまで以上に現場実習の在り方について大きな期待が寄せられており、実習先の実習指導者（以下、「実習指導者」とする。）と社会福祉士養成校教員（以下、「養成校教員」とする。）のスーパービジョンが果たす役割は大きい。そこで、本研究では平成29年度実習指導者フォローアップ研修のテーマとして取り上げ、相談援助実習の実習スーパービジョンにおいて、養成校と実習指導者との連携の現状と課題を明らかにすることを目的とした。調査は研修参加者を対象としフォーカスグループインタビューを実施した。その後、抽出されたデータを基にテキストマイニング分析を行った。カテゴリ間の関連を見るために主成分分析を行い、より詳細な分析を行うためクラスター分析を行った結果、6つのグループが抽出された。実習スーパービジョンの現状と課題として、連携の基盤にある実習指導者と養成校教員との密な会話・対話の関係構築の必要性、実習指導者の養成の課題と養成校教員の巡回指導の果たす役割分担の問題、様々な多面的側面をもつ実習生に対する実習評価・指導の難しさの3つが示された。

キーワード：社会福祉士、実習スーパービジョン、養成校教員、実習指導者、連携

I. 研究の背景

2007年に社会福祉士及び介護福祉士法が改正、社会福祉士の養成課程は2009年より新カリキュラムに移行し、実習の在り方が大きく見直され、実習教育の場における実習スーパービジョンの実

践が明確に位置づけられた。一般社団法人日本社会福祉士養成校協会 実習教育委員会（2013）によると、「実習スーパービジョンとは実習機関・施設の指導者から実習生が受けるスーパービジョンを『実習スーパービジョン』と呼び、養成校教

員から実習生が受けるスーパービジョンを『実習教育スーパービジョン』として使い分けられている。実習教育スーパービジョンは、法改正において必須となった実習中の養成校教員による週1回の「巡回指導」「帰校日指導」にあたる。実習スーパービジョンと実習教育スーパービジョンを通し、これまで以上に養成校教員だけでなくの実習指導者が協働で実習生を指導していく体制が求められた¹⁾。

具体的に、実習スーパービジョンの機会は「実習生から相談を受けたとき」「問題が起きたとき」はもちろんのこと、「実習の進行に合わせて定期的（可能な限り毎日）に行う」ものであり、さらには、「実習指導者が実習生にける言葉や支持、励ましなど、実習生の前で行う援助すべてであるとされている」²⁾。しかしながら、社会福祉の現場は、業務内容に対して十分な人員が配置されているということはほとんどなく、日常業務をこなすのに手一杯で、実習生を引き受けたものの十分なスーパービジョンを提供できない機関も少なくない³⁾。また、小松尾（2015）の調査では、社会福祉士実習指導者講習会の受講者の8割以上がスーパービジョンの経験がないまま、実習指導者として実習スーパービジョンを担う立場にあったこと⁴⁾、楢木（2013）の調査では「養成校の教員との連携が十分ではない」との指摘があり、連携が必要にも関わらず出来ていない現実があると分かっている⁵⁾。

養成校教員の現状としても「限られた人的資源の下、多くの情報を実務担当者（大抵は実習助手、助教）の巡回指導は必須とされても具体的に実習教育スーパービジョンの内容等については規定」⁶⁾がなく、手探りの状態がある。また、研究の分野においても実習スーパービジョンについては実習スーパービジョン・実習教育スーパービジョンの在り方に対する研究は進んできたものの、双方のスーパービジョンを連携して行っていく研究については行われていない⁷⁾。

実習生の学びの状態や段階に適したスーパービジョンを行うためには、実習生がどのような状態や段階にあるのか一致したアセスメントを行い、実

習指導者と養成校教員との指導に関する共通理解と情報共有、役割分担の一致、さらに学生個人に対する理解を深めていく連携は重要なことである。

本研究では、実習指導者と養成校教員の関係性に焦点を当て、相談援助実習において実習生に対して行う実習スーパービジョンの連携に関する現状と課題を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象および方法

山梨県社会福祉士会主催の2018年3月4日に実施した「平成29年度実習指導者フォローアップ研修」の参加者である実習指導者11名（男性：9名、女性：2名）と養成校教員4名（男性：4名）の計15名を対象とした。児童・高齢者・障害児者・行政の福祉施設の職員であり、実習指導経験が1年目からベテランまで幅広かった。実習スーパービジョンは、実習施設の種類・機能、実習指導経験年数等様々な背景によって異なり、可能な限り幅広く実習指導者が置かれている状況を把握するために調査対象とした。

参加者を1グループに必ず養成校教員が1名以上参加した指導者と教員とで構成された5人程度の人数になるようグループ分けを行った。また、実習指導者は、1グループに分野の異なる福祉施設の職員で構成されるようグループ分けを行った。グループで話す内容については、口頭にて参加者全体に指示を行い、テーマは「実習先と養成校のやりとりにおいて、実習スーパービジョンを行う際に感じている現状と課題」とし、養成校教員の立場、実習指導者の立場として日頃感じている現状と課題を具体的に出して話し合い、フォーカスグループインタビューを実施した。グループのファシリテーターは、共同研究者である社会福祉士会運営委員が各グループに1名入って行った。話し合いの内容については、対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音し、録音記録に基づいて逐語録を作成した。

2. 分析方法

実習スーパービジョンの連携に関する現状と課

題を検討するために得られた話し合いのデータに対してテキストマイニングを行った。本研究では、得られたデータを意味のある段落ごとに分けたものを1件の分析単位として設定した。その結果、199件の分析単位が設定された。各分析単位の内容を吟味し、指している対象が明らかな指示語(あれ、これ、他)の対象語への置き換え、明らかな間違いの修正等を行った。

上記の手続きによって得られた分析単位について、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4を用いて、形態素解析を行った。形態素とは「意味を持つ最小の言語単位」⁸⁾である。出力された形態素を見てみると、本研究の分析意図とは関係のない語彙や誤認識による語彙も数多く抽出された。これらを類義語や不要語の設定によって修正し、再度形態素解析を行った結果抽出された語彙に対して、言語学的手法(設定:すべてのタイプを対象、サブカテゴリによる階層化はせずフラットなカテゴリ出力、グループ化における共起設定なし、作成されるトップカテゴリの最大個数30、カテゴリあたりの記述子数の最小値²⁾を用いてカテゴリの作成を行った。これは、言語的な視点から似たような意味を持つ語彙をグループ化する手法である⁸⁾。自動的に作成されたカテゴリを確認したところ、本研究の目的に対して重要な語句がカテゴリとして作成されていなかったり、不要なカテゴリが作成されていたりしたため、カテゴリを手動で追加及び削除する作業を行った。IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4では、カテゴリをいかに作成するか、「分析者にとって意味のある語彙とは何か」⁸⁾に基づいて、すべて研究者に委ね

られている。今回の分析では、作成されたカテゴリの妥当性を検証するために、共同研究者である社会福祉士会資格制度委員会のメンバー、特にテキストマイニングにおいて研究実績のあるメンバーに確認・助言を得ながら選別作業を行った。

1つの分析単位内に各カテゴリに該当するテキストが含まれている場合には1、含まれていない場合には0とする2値変数とし、IBM SPSS Statistics Ver.25.0で使用可能なデータとしてエクスポートした。作成されたカテゴリ間の関係性について検討するため、エクスポートされたデータを使用して主成分分析を行い、算出した成分負荷行列を用いてクラスター分析を行った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については、調査対象者に対して会場にて、①研究の概要に関する項目、②個人情報保護法に関する項目、③侵襲および安全管理に関する事項、④インフォームド・コンセントに関する事項について口頭説明し、その場で本件への調査協力の同意を得た。また、フォーカスグループインタビューの録音について同意を得た。なお、本研究は健康科学大学研究倫理委員会の承諾を得ている(2018年9月3日、承認番号第19号)。

Ⅲ. 結果

1. 抽出された語彙

199件の分析単位に対する形態素解析の結果(修正後)、1345の語彙が抽出された。抽出頻度の多かった語彙としては、「いう」、「ある」という語彙が多く抽出される結果となった(表1)。

表1: テキストマイニングによる語彙の抽出結果(頻出20語)

いう(104)	ある(75)	学生(73)	ない(51)	実習(49)
言う(44)	思う(44)	やる(36)	やっぱり(32)	自分(32)
話(32)	中(32)	指導者(31)	なる(30)	できる(25)
ちょっと(23)	いい(23)	実習先(23)	実習生(20)	くる(19)

※()内は当該語彙が本文に含まれていた分析単位を表す。

2. 作成されたカテゴリ

言語学的手法を用いてカテゴリの生成を行い、加えて、手動でカテゴリの作成・追加・削除を行っ

た結果、19カテゴリが生成された(表2)。カテゴリを含む分析単位が最も多かったのは「学生」で92件(46.2%)、続いて「実習」51件(25.6%)、「実

表2：作成されたカテゴリ

学生(4:92)	実習(3:51)	実習指導者(8:46)	実習先(9:44)	教員(8:40)
養成校(6:34)	話(4:34)	巡回・帰校日指導(7:27)	スーパービジョン(4:24)	受け入れ(3:21)
連携(6:21)	指導(6:20)	困難(7:19)	評価(5:16)	職員(4:15)
実習中(2:14)	計画(5:14)	ソーシャルワーカー(2:9)	関係(2:8)	

※()内は左側が当該カテゴリに含まれる語彙数,右側が当該カテゴリに含まれる分析単位数をそれぞれ表す。

習指導者」46件(23.1%),「実習先」44件(22.1%),「教員」40件(20.1%),「養成校」と「話」が34件(17.1%)となった。

3. 主成分分析の結果

作成されたカテゴリ間の関連を明らかにするために主成分分析を行ったところ、固有値1以上の成分が9個見出された。成分1と成分2の成分負荷を布置したものが図1である。内容を考慮してカテゴリを○で囲み、全6個のグループが作成さ

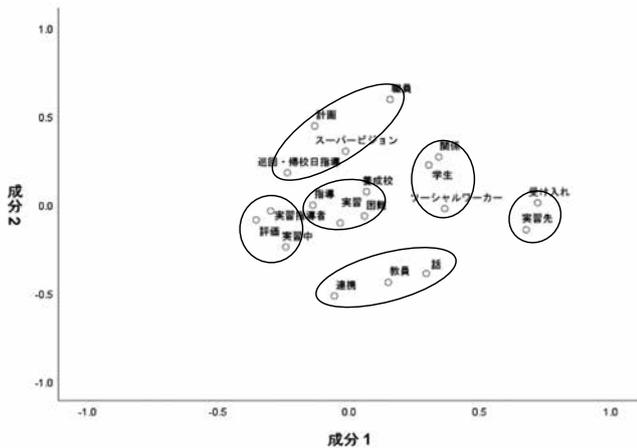


図1：主成分分析の結果

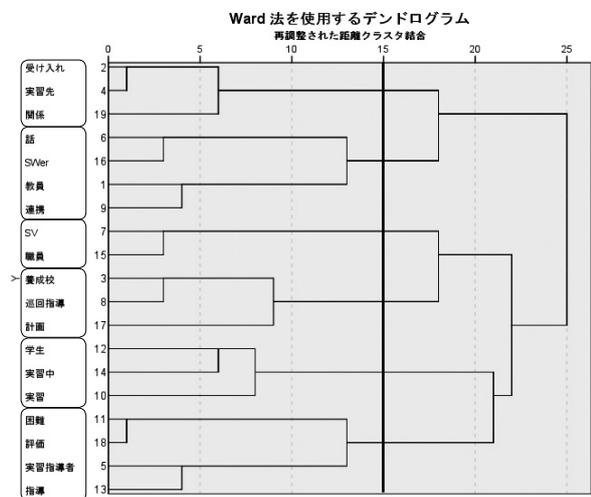


図2：Ward法を使用するデンドログラム (再調整された距離クラスター結合)

れた。

しかし、このままではカテゴリ間の関連を解釈するのが難しい。そこで、主成分分析によって得られた成分負荷行列に対してクラスター分析を行った。

4. クラスター分析の結果

主成分分析で得た成分不可行列にクラスター分析を実施した。抽出法にはウォード法、測定方法に平方ユークリッド距離を用いた。クラスターとして解釈可能な距離を15と判断したところ6クラスターが抽出され、図2の結果を得た。

IV. 考察

抽出された各クラスターについて、それぞれに含まれるカテゴリ及び当該カテゴリに含まれる語彙、元テキストデータの内容を考慮し、次の通りに考察した。

クラスター1には〈受け入れ〉〈実習先〉〈関係〉が含まれていた。このクラスターは、「実習生の〈受け入れ〉を行う〈実習先〉である実習機関・施設と養成校、実習指導者と養成校教員との〈関係〉構築が重要である」ことを表していると考察した。

クラスター2には〈話〉〈ソーシャルワーカー〉〈教員〉〈連携〉が含まれていた。このクラスターは、「実習スーパービジョンは〈ソーシャルワーカー〉という社会福祉の専門職の立場として、実習指導者と養成校教員、実習指導者と実習生、実習生と養成校教員が〈話〉をする機会であり、特にその内容を養成校〈教員〉と情報共有や役割分担をしていく〈連携〉が必要である」ことを表していた。〈連携〉には、情報共有、役割分担、フォローアップを表す語彙が含まれていた。クラスター1とクラスター2は、距離が18の地点でつながっていることから、両者の課題は相互に関連していると

解釈された。

クラスター3には〈スーパービジョン〉〈職員〉が含まれていた。このクラスターは、「実習〈スーパービジョン〉の在り方、学生の捉えをどのように引き出していけばよいのか、実習指導者である実習機関・施設〈職員〉の課題」を表していた。

クラスター4には〈養成校〉〈巡回指導〉〈計画〉が含まれていた。このクラスターは、「〈養成校〉の教員が行う〈巡回指導〉や帰校日指導は、実習〈計画〉に大きな影響を与える」という現状を表していると解釈した。クラスター3とクラスター4は、距離が18の地点でつながっていることから、両者の課題は相互に関連していると解釈された。

クラスター5には〈学生〉〈実習中〉〈実習〉が含まれていた。このクラスターは、「〈実習中〉は一人の〈学生〉であるが養成校に在籍している生徒、実習を行う実習生、スーパービジョンを受けるスーパーバイザーという様々な側面を持ち〈実習〉を行っている」という現状を表していた。

クラスター6には〈困難〉〈評価〉〈実習指導者〉〈指導〉が含まれていた。このクラスターは、「〈実習指導者〉は実習の〈評価〉や実習生に対する〈指導〉について〈困難〉を抱えている」という課題を表していた。クラスター5とクラスター6は、距離が21の地点でつながっていることから、両者の課題は相互に関連していると解釈された。

V. 結論

1. 連携の基盤にある実習指導者と養成校教員との密な会話・対話の関係構築の必要性

クラスター1・2が示すように、実習スーパービジョンを行うのは実習生を受け入れ、実習期間中指導を行う実習指導者と養成校教員の二者である。中村・塩見・高木（2010）は「協働は人と人との関係で起こるプロセスである」と述べているように⁹⁾、連携や協働において関係性というのは重要なものである。実習が始まると実習生は主に実習指導者との関わりが密になる。実習スーパービジョンというと、日々実習で学んだことや感じたことを振り返る実習指導者対実習生の関係性がメインのように感じられるが、分析結果から

実習指導者と養成校教員との関係が必要であることが示された。荒川・藤井ら（2003）は「実習は、大学や専門学校などの実習教育機関、実習先スーパーバイザー、そして実習生自身の三者が主体的に取り組んでいく共同作業といえる。この三者の間の有効な交互作用が実習教育をより充実させる鍵となる」と述べている³⁾。

実習というプログラムを行うために養成校である教育機関と実習先である機関・施設との間では、実習の受け入れや実習の内容についての連絡調整といった事務的な業務についてはなされてきたが、実習スーパービジョンや実習の評価についても連携が重要と考えられる。また、実習生である学生の理解や評価は、実習指導者の見解と養成校教員の見解が必ず一致するものではない。実習生である学生を実習指導者・養成校教員が互いに理解したうえで実習スーパービジョンを行うためにも、実習を通してスーパーバイザーである実習生の成長を促していくためにも情報共有を行う必要がある。そのためには、実習指導者と養成校教員が互いに会話・対話し合える関係性の構築が重要なものとなると考えられる。

2. 実習指導者の養成の課題と養成校教員の巡回指導の果たす役割分担の問題

クラスター3・4が示すようにまず、実習スーパービジョンを行う実習指導者の質の課題が示された。小松尾（2015）は「現在、実習指導者として実習指導を担っている多くの社会福祉士は、新カリキュラムに移行する前の、旧カリキュラム時代に社会福祉士の養成教育を受けている。つまり、自身がその養成課程で、実習教育の一環として明確に位置づけられた実習スーパービジョンを必ずしも受けてきているわけではない」と指摘し⁴⁾、実習指導者にも実習スーパービジョンを受けた経験が求められるが、現時点ではそのような対応は現実的とはいえず、実習指導者はスーパーバイザー体験がないまま、社会福祉士実習指導者講習会で学んだことを援用しながら、実習スーパービジョンを実践している状況にあることを問題視している。

実習指導者とは実習期間中に単に専門知識・専

門技術を教えるだけでなく、目の前の実習生が養成校で学んできた専門知識・専門技術が、実際の現場の支援場面でどう活用・変換・展開されているのかを見極めたうえで、実習スーパービジョンを展開していくことが求められる。実習指導者としての力量、現場における支援者・実践者としての力量に加え、スーパーバイザーとしての力量が求められる。これは単に実習指導者個人の経験・努力に任されるものではなく、養成していく研修の機会も必要であると考えられる。

一方、「相談援助実習」において行われる実習巡回指導や養成校内で行う「相談援助実習指導」における実習生への関わりは、養成校教員が行う「実習教育スーパービジョン」であるといえる。福富・坂下（2010）は巡回指導において教員の果たす役割をスーパービジョンの3つの機能として、「①管理的機能として、担当教員は訪問時に、実習生が「実習生としての行動」がとれているかを確認し、必要に応じて「実習指導者との調整」を行い、「実習計画書と日誌の確認」を行う。また、「実習取り組みの修正」や「実習目標の意識化」を図る。②教育的機能として、担当教員は「実習計画書と日誌の確認」を行い、実習に関する実践的な指導を行う。③支持的機能として、担当教員は実習生の「精神的サポート」を行う」としている¹⁰⁾。先に述べた実習指導者の養成の課題はあるが、その課題を補っていくためにも養成校教員の巡回指導・帰校日指導が大きな役割を持っているものと考えられる。

岡・田中・袖井（2013）は「養成校実習担当教員と実習指導者は、実習前の打合せや実習巡回訪問等を通して、①「職場実習」「職種実習」「ソーシャルワーク実習」の3段階を踏まえた実習になっているのか、②実習生の理解度と実習内容の乖離はないか、③実習ガイドラインに掲げられている項目で実施困難な内容については、どのような方法を用いるかということなどについて、協議を行っていくことが必要である」と指摘している¹¹⁾。ソーシャルワークの実践者としてのスーパーバイザーである実習指導者とソーシャルワークの理論の教育者としてのスーパーバイザーである養成校教員

それぞれの立場から行う双方があり、その両者が一つに連動することで実習スーパービジョンが成り立っているものと考えられる。

3. 様々な多面な側面をもつ実習生に対する実習評価・指導の難しさ

クラスター5・6が示すように、「実習生」と一言で表現しても、目の前にいるのは一人の人間であるが様々な側面を持っている。一人の人間としての側面、養成校に在籍する学生・生徒としての側面、実習を行う実習生としての側面、スーパービジョンにおけるスーパーバイザーとしての側面、社会福祉士を目指す専門職の卵としての側面である。対峙する人との関係性、場面によりその側面は変化する。実習スーパービジョンにおいて実習指導者と実習生との関係性を表したものが図3に示したものである⁴⁾。

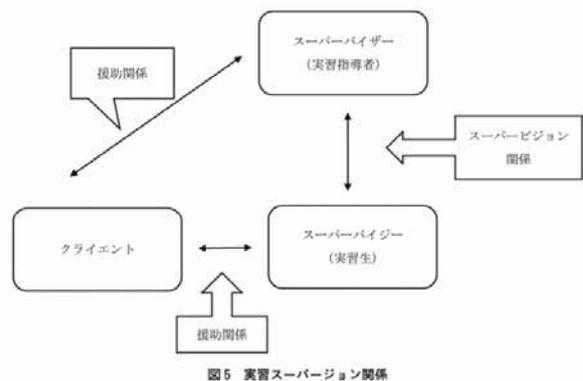


図3：実習スーパービジョン関係図

注：小松尾（2015）より引用

また、実習指導の場面においては、実習指導者と実習生の関係性だけではなく、様々な関係性が生じる。藏野・朝倉（2016）は「①実習生と実習指導者関係、②ソーシャルワーカーとしての実習指導者と利用者との支援関係、③実習生と利用者との関係、④大学などの養成校の学生である実習生と実習担当教員との関係、⑤実習指導者と実習担当教員との関係」という5つの関係が同時に存在することを指摘している¹²⁾。これは、スーパービジョンを行うバイザーとバイジーとの関係ではなく、様々な関係性が生じていることを示すものである。実習スーパービジョンにおいては、これらの関係性を把握した上での関わりが重要で

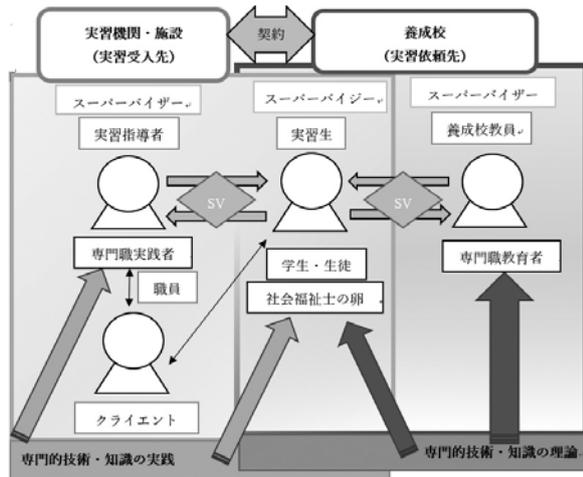


図4：実習スーパービジョンにおける関係図
 注：小松尾（2015）参考に分析結果・考察をうけ
 概念図を作成

あると考える。実習スーパービジョンにおける関係性を図にまとめると図4のように示すことができる。

実習が行われる現場でのソーシャルワークの実践と養成校で教育されるソーシャルワークの理論の内容は同じ専門である「社会福祉」の視点に基づいているが、実習生がスーパービジョンを受ける際に出された内容がどの側面を感じた内容なのか、スーパーバイザーとしてスーパーバイザーのどの側面に働きかけてスーパービジョンを行うのかを見極める必要がある。さらに、実習という場であることから実習スーパービジョンだけではなく、実習に対する評価・指導を行う必要もある。丸山（2012）は「ソーシャルワーカー養成教育という視点でとらえなおすなら、4年間の大学教育におさまりきれものではないこともすぐに気づくだろう。「人」としてのソーシャルワーカーを介した実践活動として体現する以外に、その技術や専門性を伝えることは難しい。」とその難しさについて指摘している¹³⁾。ソーシャルワークという分野の専門性を養成していくこと、教育していくことの難しさを踏まえたうえで、実習スーパービジョンについては具体的にどのような方法で行うことが効果的であるのかその内容をさらに検討していく必要があると考える。

VI. 研究の成果と今後の課題

今回は山梨県の一つの研修会で得られたインタビューデータを基に作成した逐語録データに対してテキストマイニングを用いて分析を行ったが、仮説の検証及び結果の一般化のためではなく、仮説の生成を目的とした分析であることは避けられない。今後も行われる山梨県社会福祉士会での実習担当者や養成校教員向けの研修の場等を活用し、現場での声を拾い上げる調査・研究を重ねていくことで、今回しめされた研究の考察や結果の内容がさらに精査されていくものと思われる。今回の研究は山梨県で行われている実習スーパービジョンの実習担当者と養成校教員との連携の現状と課題を考えていくための基礎資料となっていくのではないかと考えられる。

また、実習スーパービジョンの現状と課題だけにとどまらず、実習生に対して実習指導者及び養成校教員が実習スーパービジョンをどのように行っていくかという具体的な方法についても研究の必要性が感じられた。この点については、今後の研究の課題としたい。

VII. 謝辞

本研究をまとめるにあたり、社会福祉士相談援助実習の受け入れ先である施設・機関の実習担当者の皆様には調査・研究の趣旨を理解し、調査協力を快く引き受けていただきました。ご協力いただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。謝辞にかえさせていただきます。

VIII. 文献

- 1) 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会 実習教育委員会「相談援助実習・実習指導ガイドライン および評価表」2013.
- 2) 内田充範（2013）『山口県立大学学術情報』「日誌から探る実習スーパービジョンの実際：実習指導者としての社会福祉士の役割」6, 17-26,2013.
- 3) 荒川義子・藤井美和・大和三重他「社会福祉実習におけるスーパービジョンの研究—スーパービジョンに対する学生の満足度に影響を与える要因について—」関西学院大学社会学部紀要 95, 71-78,2003.
- 4) 小松尾京子「実習指導者による実習スーパービジョンの課題—教育的機能を中心として—」『日本福祉大

- 学社会福祉論集』,133,2015.
- 5) 梶木博之『身延山大学仏教学部紀要』「社会福祉士実習における実習施設と養成校における実習プログラミンの協働」(14), 65-75,2013.
 - 6) 塩村公子『ソーシャルワークスーパービジョンの諸相 重層的な理解』中央法規,2000.
 - 7) 坂本毅啓・佐藤貴之・中原大介「社会福祉士養成教育における相談援助実習指導支援システムの提案」教育システム情報学会, 第42回全国大会資料,275—276,2017.
 - 8) 藤井美和・小杉考司・李政元『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規,2005.
 - 9) 中村和彦・塩見康史・高木穰「職場における共同の創生」『人間関係研究』(9), 1-34,2010.
 - 10) 福富昌城 坂下晃祥 (2010)「相談援助実習における巡回指導の役割と課題 一週1回体制の巡回指導の事例研究」花園大学社会福祉学部研究紀要 第18号, 17-30
 - 11) 岡佐智・田中将太・袖井智子「社会福祉士養成における相談援助実習の実態と課題(1)—旧相談援助実習ガイドラインからみた実習内容の課題—」『福岡県立大学人間社会学部紀要』, 22, 2, 35 - 54, 2013.
 - 12) 藏野ともみ・朝倉由衣「福祉専門職の実習指導におけるスーパーバイザーが抱える問題」『人間関係学研究：大妻女子大学人間関係学部紀要』(18), 59-64, 2016.
 - 13) 丸山裕子「社会福祉士養成教育における ソーシャルワーク演習の位置と課題 担当教員からのヒアリング調査にもとづく考察」『桃山学院大学総合研究所紀要』38 (1), 211-224, 2012.

(受付日 2018年9月24日)

(受理日 2018年12月13日)

Abstract

In recent years, diverse issues of social welfare have come to attention and the demand for professional social workers in terms of both quality and quantity has been increasing. This in turn leads high expectations of the field training for certified social workers, and the roles of field work supervisors and school instructors of certified social worker become critical. The aim of this study is to identify the current situations and issues regarding cooperation between supervisors and school instructors. A focus group interview was performed and the data was analyzed using the text mining technique. Principal component analysis (PCA) was used for summarizing and visualizing the data information. Cluster analysis used for grouping the data classified issues into six categories. As current conditions and challenging issues, “the necessity of building a corporate relationship between the supervisors and the instructors through close communication,” “issues of supervisor training and the instructor’s roles at visiting,” and “the difficulty associated with evaluating and directing diverse students” are identified.

Keywords : Social worker
Practicum Supervision in the field
Field work supervisor
School instructors of certified social worker
Collaboration